令和４年度　第３回　西宮市立こども未来センター運営審議会　議事録

令和５年３月２７日（月）14 時 00 分～16 時 10 分
開催場所：　こども未来センター４階　会議室

出席者：【委員】　新澤　伸子、松井　学洋、金髙　玲子、畑本　秀希、田村　三佳子、
武山　正樹、若松　周平、原田　愼一、出路　賢之
【事務局】　こども支援局長　伊藤
こども未来部長　大神
学校教育部長　　杉田
こども未来部参事兼地域・学校支援課係長　繁田
こども未来部参事兼特別支援教育課長　會澤
こども未来部発達支援課長　地行、同係長　吉田、藤長
こども未来部診療事業課長　谷口、同係長　坂本
こども未来部地域・学校支援課長　安積、同係長　齊藤
地域保健課担当課長　中東
次　　第：　議事　（１）こども未来センターのあり方（提言案）について

開　　会

・ 傍聴者　２名

○　議事１　こども未来センターのあり方（提言案）について
事務局より、資料に沿って説明を行った。

【会長】
ＡチームＢチームという仕組みができて今動き始めているという事だが､この仕組みの中で、診察待機の解決に至るのか、それとも新たな課題が見えてきたのか。

【事務局】
地域にも相談できる医療機関があるという紹介をした結果、かなりの方が行かれたことでこども未来センターの待機期間が少し短くなってきた。しかし、A チームもだんだん待ち期間が長くなり、再診件数が増えてきて初診の方が診られないという、こども未来センターと同じような状況になってきている。それにより、こども未来センターの待ちもまた延びてきた。再診の方で可能なケースを地域の医療機関にお願いすることで、少しでも初診枠を確保していきたい。

【委員】

北山学園の実績について、もう少し詳しく説明してほしい。

【事務局】

令和３年度は、コロナウィルスの感染拡大ということで外部の受け入れが困難であったため、わかば園からの保育所等訪問支援がかなり少なくなっている状況。令和４年度からは緩やかになって増えつつある。令和３年度は実績が少ないが、令和４年度は増えていると聞いている。

【会長】

わかば園の保育所等訪問支援と比較すると、事業概要では保育所等訪問支援は令和３年度で６４件と上がっている。コロナ禍による学校の問題は同じだと思うので、６４件にくらべて北山学園の２件というのはかなり差があるように思う。どのように分析しているのか。

【事務局】

北山学園に確認できていないので、改めて報告させていただきたい。

【会長】

アンケート結果等から、こども未来センターですべてを解決していくのが難しくなっており、地域資源との連携や育成していく視点が重要と思う。北山学園や他の児童発達支援センターとの連携強化、役割分担が提言案に盛り込まれているので説明してもらった。提言案のまとめから、市長への提言、ホームページへの掲載に至るまでのロードマップの説明があったが、当初は令和４年度中に完了する予定だった。

スケジュールの遅れに加え、令和 4 年度の途中で委員の改選があったので、新しい委員の方と運営審議会やワーキングで積み重ねてきた議論がしっかり共有できないまま、運営審議会の提言案としてまとめてしまうというのは時期尚早な気がしている。

新しい委員の方には、昨年度までの資料やアンケートのローデータのまとめも十分共有できていないので、ワーキングで練った提言案について意見をいただき、令和５年度にまとめていく形で進めたい。素案という形ではあるが、委員から意見をいただければと思っている。

【委員】

スクラップアンドビルドによって整理されているが、公的な施設として、どういう役割を果たしていくかが一番大事なところ。こども未来センターだけでは追いつかず、子供たちが一年待ちなどとなっていて、もっと早く診察を受けて、訓練や療育が始まればいいと思う。改善されたと思うが、もう少し役割分担ができればと感じている。

【委員】

追加された部分がそれ以外の部分と表現の仕方があっていないと思う。提言なので、何をすべきかもう少し端的に書いた上で表現を統一する方がよいのではないか。

【会長】

前回のワーキングでいろいろな意見が出た後、練り直さずに入っている部分がある。「こども未来センターの在り方についての提言」の最初の３つのまとめ方と重複したり、表現の仕方が統一されていないのはそのような事情がある。

議論の中で、内部の運営で改善できる部分とこども未来センターだけで頑張ってもキャパオーバーしている部分で、地域の体制を整えていく必要があるという視点でまとめられた部分が最初の○４つ。10 ページから後の部分はこども未来センター内部での調整で解決できる部分となっている。意見をもとにわかりやすい表現にまとめていきたいと思っている。

令和元年度にアンケート調査を行い、５年の振り返りをする見直しは、西宮市における支援体制全体の在り方の見直しも含まれている。市全体の体制についての提言と、こども未来センターの在り方についての提言と分けた方がよいかもしれない。ワーキングでそこまでつめきれなかったので、このような形の提案となった。

【委員】

未来センターの位置づけがはっきりしていないことを調べてみた。福祉計画の中で、はっきりではないものの描かれていると感じた。こども未来センターが児童発達支援センターとしての中核的な位置づけで出発しているのではないという経緯がある。

かつてわかば園は重度の肢体不自由児の通園施設であった。こども未来センターでの支援に非常に期待感を持って開所を待っていた。ところが、肢体不自由の重度の子供たちはどこへいってしまったのか、この支援センターがこれからどういう働きをしていくのか。委員として、中核的な位置づけでセンター的機能をもってやっていって欲しいと言えるか、私自身まだ答えが出ていない。医療も地域に分散化していっていることがよいと感じる。

こども未来センターの医療では、ドクターは業務外の事も多くされていると思う。見立てができる医療部門が地域にあることで、困り感を解決するのが早いという実感を持っている。

そういう意味で、できている部分もしっかりと把握しておかないといけない。提言を見ると、どこもできていないように感じるが、できている部分もある。

【会長】

７～８ページのアンケート結果では、課題、できていない部分ばかりが書かれている。運営審議会でも市民向け、利用者向け、関係施設向け、自己評価、それぞれのアンケート結果をよかった点と課題点という形でまとめられていたので、そのような形でまとめ直しをしたい。今は、課題抽出に至る根拠としてどんな課題があったかという形でまとめているが、うまくいっている所はさらに推し進めていく必要がある。課題だけにならないように修正をしていきたい。

【委員】

資料全体に目を通して感じるのは課題の多さで、これを全部解決するのは不可能に近いという印象を受けた。西宮市の予算や人材に限りがある中で、多くの課題のどこからやっていくの

か整理が必要。数値が一つのキーワードだったと思うが、その効果の大きさをしっかり見ていこうという前回の話が提言部分に盛り込まれていると感じた。この数値のとらえ方を決めるのは、西宮市の中での位置づけにすごくかかわってくるという印象を持っている。

こども未来センターの中でできることとできないことの整理ももちろん必要だが、西宮市においてこども未来センターでなければいけない部分、民間とどう協働するかということもある。

そういったところから整理して優先順位をつけなければいけない。その中で、こども未来センターが特化していく所を明らかにしないと、この膨大な課題が全てこども未来センターにかかっているというのは無理がある。こども未来センターで担いきれないと感じた。

ここから必要になるのは優先順位のつけ方のコンセンサスであり、今現在誰がどのくらい必要としているのかという数値に加えて、特別支援学校が新設されたように障害をもっている子供が増えていることを考えると、今ある課題が5年後10年後も同じかという疑問が残る。

5年後10年後にどれくらいのニーズがあるのか、そのニーズの中での重要性や、それを未来センターで引き受けなければいけないのかどうか。それを考えていくために、こども未来センターの西宮市の位置づけを明確にし、優先順位づけすることが重要だと思う。その優先順位のつけ方についての議論が必要で、その上でこども未来センターだけの提言ではなく、西宮市への提言とわけて提案が必要。

【委員】

連携という言葉が大きな方向性の部分と各章で多用されているが、連携がゼロというわけではない。こども未来センターの職員が感じている難しさが自己評価の結果にあらわれている。

連携という方向性はわかるけども、実際民間や他事業所、学校とこども未来センターが連携しようと思っても、ニーズの共有や方向性の一致が得られないことがあるという職員の方々のまとめもあった。連携を進めていこうということに異論はないと思うが、実際現場で連携のどの部分で前に進まないのか着目する必要がある。それは審議会で議論すべきかわからないが、仕組の問題や連携の在り方などであれば、実際のケースで何が起こっているのかを把握していかないと連携が進まない。

地域に療育に通える所がない時代に、各機関をつなぎ合わせてできた頃のこども未来センターの役割や経緯を大事にしないといけないし、そこを担ってきた皆さんに対しての敬意を持つ必要がある。実際的に求めている家庭に対して、公しかなかった時の療育や支援が民間でもできるようになってきたが、何が必要なのかしっかり議論していかないといけないし、民間の事業所も頑張っていかないといけないということを、この提言を考えていく中で自覚したところ。

【委員】

わかば園しか知らない世代だが、民間ができてよかったぐらいの感覚で、久しぶりにこの世代の事を聞いて、全然違う印象を受けた。課題が満載ではあるが、もっと楽しくやらないとしんどいのではないか。

他府県のプロジェクトでは、「感覚統合遊び」という冊子を作っていた。コロナ禍で助成金を得て、個別と集団のポイントを解説して保育所、幼稚園に配布している。私も拝見したが、非常

によくできている。

例えば、社会資源として保育園や幼稚園で職員が療育に関する知識を共有できるようにするために、人が行って説明するだけでできるようなものではないので、イラスト入りで、個別療育でこうやると子供の反応がよいなど、形で残る物を提示していくとか、できることはある。問題が山積で解決できないと思うので、AI とか詳しい人を入れないとまとまりきらないと感じる。

社協の会に参加してきたが、年配の方が多くこの辺の話題が全く出ないしつながっていない。私の立ち位置では、未就学児から学校卒業してその先もずっと繋がっている。医療の問題一つとっても生まれてからのつながり、未就学・学校時期・卒業後の連携が取れていないということは、今この世代になってみるととても怖いことだと思う。

【会長】

こども未来センターの対象とする年齢とそれ以降のつなぎの部分が本当に最も重要で、委員が言われたように、5 年後 10 年後に今利用されている方たちが学齢を過ぎて成人になる時が本当に大きな問題なので、それをこの提言に盛り込みたいが、そこに行くまでに解決しないといけない問題もたくさんあると思う。

【委員】

アウトリーチは自律か他律かわからない部分もあって、これはこども未来センターがやることなのかどうか。今やっているけれど、責任をもって着地まで持っていけるのはあくまで自律の所であって、他律要素が入ると着地まではできない。あくまで支援しかできない。それをどこがどうするのか。市に提言するという話もあったが、そうなのかどうかもわからない。

こども未来センターの自律部分をもっと深堀した方がよいかもしれない。いつまでにどれだけということも、自律部分はできるかもしれないと感じた。

ぶつ切りの世界は私も前から気になっていて、民生委員をやっているといわゆる 50・80 がたくさんいる。80 代のお母さんは、自分が死んだら支援が必要な子供がどうなるのかと心配されていて、ここの議論では難しいけれど、そういう事も気になる。発達支援が必要な子供も成人していくのですから、医療は成人後も全部ではないが、継続して診られるようなことが入らないかと思う。

【副会長】

ワーキングでいろいろ発言したので、基本的にはこういう形でまとめたものが私自身の意見ということになる。細かい改善点があって、それを一つずつ直していくのも大事だと思う。多領域の専門職が集まっていろんな領域の部署がある組織の場合、全体として方針がないと結局は小さな課題もどう修正していくか見えなくなるし、こども未来センターとして今後どういう役割を果たしていくのか、公的機関だからこそできることは何なのか、こども未来センターはここを担ってきますというような大きなテーマや方針が必要だと思う。

公的な機関というのは入り口として信頼されている部分がある。どなたにも来ていただける入り口機能と、ここに相談すればどこかにつながれるというワンストップという話をしている

が、それが組織として難しいとしても、それに代わるフレーズなりテーマがあった方が関わる人達が共通理解しやすいと思う。

子育てしていく中で、子供が成長していくというのは連続性があり、そこで出てくる課題や発達の心配事は連続していく。そこで行政サービスとして、最初に乳幼児健診があって西宮市のすべての子供とご家族が発達なりのチェックを受ける。健診でピックアップされた子供たちが療育センターや児童発達センターに行って早い段階で療育を受けていくというのが一つの大きな流れだと思う。障害児支援の中で一番重要なのはやはり早期発見と早期療育という２つの視点だと思う。それを行うことで将来的に社会的適応能力が上がって、スムーズにやっていけるという報告がいろんなところで上がっている。早期発見・早期療育の事を考えると、他機関との連携、例えば乳健でどのように連携・情報共有して引き受けるのか、その辺も必要だと思う。

アウトリーチも広い事業だと思うが、私も４月から別の自治体で保育所の巡回指導をさせてもらっている。西宮市で保育課・教育委員会がそういうアウトリーチ事業をやっている中で、こども未来センターは何故それをするのか。教育委員会、保育課ができない所をこども未来センターが担っていくのか。何か別の理由があってやっているのか、どう連絡調整を行って役割分担しているか、行政の中でどういう役割を担っていくのかという所に行きつくのではないか。

こども家庭センターからこういう話があったとか、他の部局の話が全く出てこないのでそこが普段から情報共有が難しい所なのかと感じる。もっと他部署の名前が挙がってくると非常に連携がうまくできていると感じる。

【事務局】

こども未来センター開所当時から保育所事業課との連携で、保育所向けの支援をしている。行政は、公立・私立・年齢で業務が分かれるところがあるが、本課の心理士は保育所、幼稚園、小学校、中学校、市立高校でも連携しており、縦横のつながりができる強みを持っている。ここ数年のアウトリーチを分析し、次年度に向けてわかりやすく業務整理しているところである。

教育委員会の機能としての巡回相談や専門家チーム業務なども本課が行っており、併任の担当者もおり他部署連携の仕組みはある。

こども未来センターでコーディネーターを育て、各学校園所で子供達への支援がうまくできるようにスキルアップできる研修の仕組みや内容の充実なども企画している。

【副会長】

そういった役割分担が市民や学校関係者に伝わっていくと、メインとなって相談してくださいと言いやすい部分があるのではないかと思う。

【会長】

ここから、共通する部分やさらに深堀で意見交換していくことで進めていきたい。

課題は挙げたらきりがないので優先順位をつけていく必要がある。こども未来センターが西宮市の中でどのような位置づけにあるのか、国が児童発達支援センターに求めているのは地域の資源を育成していくための中核的機能であること、アンケート結果で利用されている方々か

ら質に対して高い満足を得ており、アウトリーチを受けている学校園からの信頼度も高い。初診待機と初診の後リハビリを受けるまでの待機期間という実態が浮かび上がったのが、アンケートの目立った点だと思う。

地域分散化という事で、医療ではその試みが始まっているが、西宮市の中でどういう位置づけなのか、こども未来センターの今後の在り方を考えるときに、こども未来センターという存在をどう活用していくかという事で、こども未来センターの職員や、西宮市の職員よりも委員の方が言いたいことは言えると思う。

長期的なスパンで見直しをして提言をするのは、今回の提言の次はまた 5 年先となるので、どういう位置づけであるかを盛り込みたいと思っている。位置づけについても意見があり、入口でワンストップでも、利用される方が満足できるような紹介先がなければ、ワンストップで受けて紹介してもまた戻ってくることになる。その辺りも含めて、こども未来センターの位置づけをどう考えるか、そのためには何が必要なのかを、踏み込んで提言に入れてはどうかという意見もあるので、その点について意見をいただきたい。

【委員】

副会長が最初に言われた早期発見、早期療育という言葉はすごく響いた。アウトリーチが本当によかったのは、園で共有が図られ、みんなが一つの方向を見ることができたこと。本当に迷いながらの日々を送っている。いろんな子がいて、子供たちに対して自分のかけた言葉がこれでいいのかとか、そんな繰り返しの中で、アウトリーチに来ていただいて一つの方向性を示していただいた。

【事務局】

アウトリーチは、気になる子を見つけるといった早期発見に行っているのではない。保育所の先生方や園、小学校、中学校の中で工夫できることや、全体の中での子供たちの育ちという視点で助言する後方支援で訪問しており、療育を始めたらよいというような助言は行っていない。

【委員】

アウトリーチに来ていただいたおかげで私たちの目が養われた、迷っていたところがはっきりと視点を与えられたという事で、私たちが相談してみませんかという事を言えるようになったということ。アウトリーチで見つけに来ていただいているとかは全く思っていない。

アウトリーチはあくまでも私たちがどのように対応すればいいのかを助言いただく場だと思っている。そのおかげでみんなが一つの出口、一つの方向に向かっていこうと思えることはありがたいと思っている。

【会長】

今現在アウトリーチを受けているところは非常に満足度が高いが、それを全ての園にというのは、無理な話。議論としては、こども未来センターが提供しているような質のものをさらに分散化して受け入れられるような仕組みを作っていかないとまた待機が長くなる。令和 4 年度の

事業概要では、令和3年度の学校園支援アウトリーチが267回で幼稚園が92回なので、三分の一以上が幼稚園ということになる。アウトリーチに行った園や学校が自律していく仕組みを作るという事も必要。こども未来センターの位置づけ、あり方、そのために必要なことという事でご意見をお願いしたい。

【委員】

優先順位のつけ方として意見があったが、親の立場としての視点が抜けていると思った。初めてわかば園を訪れた日のことは今も忘れないほど安心した親の心情。行政にしっかりサポートしてもらえるという安心感が親のサポートだと思う。子どもは早期発見・早期療育が一番大事だと思うので、こども未来センターがその入り口であってほしいという願いは親として切実に持っている。放デイや民間のサービスがあることさえわかっていなかった。その時点で西宮市と繋がってサポートしてもらえるという安心感が親として前向きになれるものであって、これからも市の支援を受けながら生きていくことに関係する部分。西宮市と接点を持ち続けていける事は親として安心材料である。こども未来センターとしてのリソースという所もあるが、周りからどのようにみられる存在か、市だからこそという、どちらかというと心情的な部分も含めてこども未来センターの今後の在り方を考えることは親の立場として重要なこと。

最初は不安しかなく親の負担は始まり、その時にまずどこに行くかという所でやっぱり西宮市に関わっていくのが重要だと思う。同じようなことを経験する人たちのことを考えると、西宮市におけるこども未来センターのポジションをしっかり確立することが重要であり、こうした要素も優先順位の中に含めていただきたい。

【会長】

それは気軽に電話してワンストップで受け入れてもらえる所が必要だという事か。

【委員】

親として西宮市に関われたことがまず安心につながる、親が前向きになることが早期療育につながっていると思う。親がポジティブになることで外に目が向くということが療育に繋がっていると思うので、親の心情を先ほどの要素に入れるのであれば、待機期間が長いということは優先順位が高いわけではないという考え方もあると思う。

【会長】

ワンストップで受け入れると逆に待機が長くなる。

【委員】

ワンストップとして一機関の中ですべてが完結するということはまずありえない。こども未来センターに来たら信頼のできる所に紹介ができるというのがあるべき形だと思う。まず、こども未来センターに来ればというのは賛成だが、その後続く事業まで全部こども未来センターが抱えるというのは、今の課題を見ても無理があり、整理が必要。

【委員】

社会資源として、アウトリーチや保育所等訪問を聞いているうちに、父母の会も社会資源だと改めて思った。父母の会は 60 周年のサイクルに入り、区切りなので会報誌がある。昭和 40 年頃を読み直したら、今とは全く違う大変な時代を乗り越えている。戦後から障害児者がいて、大変なところをどう乗り越えてきたのか、就学猶予等の時代背景、私も会長をさせてもらって、全国に仲間がいるが、「西宮です」というと、教育も福祉もすごく進んだことを言われる。私には心当たりがないので、当たり前に受けるという立ち位置だが、当時の市長が教育福祉に関して先端を目指して、全国になかった養護学校ができた。そういう事から考えると、やはり親の力は大きい。時代が変わって親が強くなって行政が言う事を言えなくなっている関係性もある。

私が思うことは、強い行政であってほしいということ。親の意見が尊重されがちだが、向かう方向にお互い協力していかないとバラバラな感じがしてならない。こども基本法はまさに、本当にいいタイミング。ようやく子供の権利が認められる時代になって、その解釈も伝えられるということ。子供の人権を市としてしっかり解釈していく事が大事ではないかと思っている。

父母の会が社会資源としてできることがあると感じ父親の勉強会をやっている。父親も資源である以上、親父が引っ込んでいる場合ではない。社会資源として頑張りたいと思う。

一番言いたいことは強い行政であってほしいということ。

【会長】

どのように強い行政になるかというと、当事者がニーズをきちんと伝えて、行政がそれに答えていくということだと思う。

ペアレントメンター育成事業について厚労省が旗を振って 5 年以上になる。他の自治体で事業に関わっているが、西宮市はペアレントメンター事業を行っているのか。こども未来センター一極集中ではなくて、当事者やそういうものも活用していくという視点の一つとしてどうか。

【事務局】

県のクローバーという発達障害者支援センターが本部として、継続的に取り組んでいたと思う。西宮からも何名かが研修受けて地域展開をしていた経緯も聞いていたが、現状として具体的にそういったことは進んでいないと聞いている。

【会長】

ペアレントメンター育成事業も厚労省の事業として各都道府県の自治体でなされているが、メンターが地域で活躍していくためにはフォローアップ、メンターを継続育成していくような自治体のバックアップが必要であり、社会資源として親の会の存在が大きいのではないか。

先ほどの強い行政であってほしいというのは、向かうべき方向性を明確にすべきという事で言われていたが、今回の提言にもそのようなことを盛り込みたいと思う。

【委員】

他市で養護学校に行ったが、副学籍というのがあり、地域の学校と年に何度か交流があった。交流していくうちに子供たちも素直なところが出てきて、すごくいい関係ができた。海外も見たいと思って、オーストラリアに 1 ヶ月半ほど行って養護学校に入学した。オーストラリアに行ってびっくりしたのは、行政が強いということ。強いと言っても押さえつける強さではなく、「お母さんそれ違うよ」とソフトな感じで明るく反対されるというか、今思うと正しい方向性を導き出している感じがする。

その根底には人権というものがあるとすごく感じた。多民族国家で、人権がベースにあって物事が全て構築されるという感じがした。オーストラリアで訳されたことを聞いていると、非常に人権をベースにしているので、言葉が温かい。車椅子が人をかき分けてエレベーターに乗る日本と違い、皆が優先してエレベーターに連れていくような。この違いは何だろうと思っていたが、根源はやはり人権ではないかという気がする。子供のために親がやってしまおうとすると怒られる。「あなたはこの子の自立をさまたげている」としっかり言う。だから本当のやさしさってなんだろう、根源は人権ではないのか、というようなことをこの十数年考えてきた。

こども基本法という貧困の問題など子供の権利、子供のための法律ができたことは大きい。

【会長】

それでは同じテーマで、こども未来センターの位置づけについて他の委員から意見をいただきたい。提言案にどういう事を盛り込めばいいのか。

【副会長】

すぐに変わるというのは難しいが、こども未来センターだけですべてを受け入れるのは現実的ではないし、中核施設として、国もそういう役割を求めてきているので、障害児とご家族を支援する上での各自治体での中核的な場所、位置づけという意味では国の方針から考えても一つの基準になると思う。一般市民の感覚として、こども未来センターは公的な機関で、中核としてセンターの役割があると私も感じていたし、そうみられるのが一般的ではないか。各自治体で相談を受けていく中で当然キャパシティがオーバーしていく事態になっているし、次のステップとして重要視されていることとして引継ぎ先の視点で苦労されている。こども未来センターと繋がっても、その後にどこかと繋がっていくのが大事。児童デイかもしれないし、診療所かもしれない。今後できるこども家庭庁の方針でもある孤立化を防ぐために行き先をどんどん探していく必要がある。その上で社会リソースというか最も大事な地域資源の量や質を向上させていく事が求められているので、唯一の公的なセンターとして指導助言を行っていくなど。

療育センターであれば児発に出向いて保育士に指導をしているが、そういったことはセンターでないとできないと思うので、中核化とそれから地域支援の部分のベースで質を上げていくというのもセンターとしての大きな役割ではないかと感じる。

【会長】

是非提言に入れて欲しいという意見があればお願いしたい。

【委員】

提言するからにはそれを明確にする根拠があるのかが大切。現状の数値などを踏まえたうえで、こども未来センターが立ち上がった経緯も大事だと思うので、数字的な物と、こども未来センターの歴史的なことで必要だと思う所、何か根拠をもって描かれるものが欲しいと思う。

【会長】

目標をもって進めていくことはとても大切である。西宮市の関連のホームページや、障害福祉推進計画などを確認したが、データがきちんと出ていない。3 年経てばその時々の現状も違ってくるし、こども未来センターが毎年細かく出している事業内容の数値を分析したら開設当初と今で利用状況がどれだけ変わってきているかすごく明確である。障害福祉推進計画にもそこを盛り込んでほしい。西宮市に医療福祉三位一体のこども未来センターができたので、障害児の事はこども未来センターにまかせたら間違いない、という所からスタートしたことが、逆に地域が育っていないという現状であり、障害福祉推進計画にその推移が盛り込まれていないという現状だと思う。だれの責任という事でなくて、親の会なども同様に同じものが出ているのはあり得ないと思う。事業概要として毎年報告されているが、これを見ると有益な分析ができる。例えば診療所にどこから紹介されているのかを見ると、平成 29 年度には保健福祉センターが一番多く 200 件くらいだったのが、令和 3 年度は 65 件と三分の一になっている。逆に医療機関は平成 29 年度が 117 件で令和元年度は 61 件とすごく減っている。医療機関から紹介されずに A チームや B チームに振り分けられていたのが、令和 3 年度に逆に 131 件と増えている。乳健や保健福祉センターから上がってこなくなったことの分析も必要である。

こども未来センターの専門的なリハビリ、ＯＴ、ＳＴ、ＰＴについて、ＯＴは 500 件のうち半分は自閉症スペクトラムの方。ＳＴも約半数は自閉症スペクトラム。これだけ自閉症スペクトラムの方が専門的なＯＴやＳＴのリハビリを受けているという事は逆に他の障害の方のリハビリの回数を圧迫しているかもしれない。

私が思う強い行政というのは、出てきた数字を分析してそれを障害福祉推進計画に盛り込んでいくとか、その中でこども未来センターの位置づけというのが明確になってくると思う。

行政、当事者の会、第三者外部委員、それぞれ立場は違うけれども、こども未来センターで資源をさらに有効に活用するということ。今回のアンケートでは待機が長いと書かれていたが、1 年待ちとか 2 年待ちとか当事者感覚としてあり得ないと思う。ワーキングを開催したいと思うので、ご意見いただいた部分で優先順位をつけたい。西宮市の担当課にお願いしたいことは、根拠となる資料の数値を分析して一緒に考えていただけたらありがたい。

【事務局】

今日頂いた意見を踏まえて、新たな案をとりまとめたい。提言については、市に対する部分とこども未来センターと切り分ける、優先順位をつける、といった意見があった。さらに、根拠理由も必要という意見もあったので、用意する。書面やメール等で意見をいただければ、その部分についても反映させてワーキングで議論したうえで、改めて運営審議会に提出させていただく。